未来を創る財団 Newsletter
Future + No. 5 Feb 2017
"A brighter future for the next generation"
The Outlook Foundation

地方創生 ― 地方で暮らす価値の創造 ―　　フューチャー ＋ 第５号

中貝　宗治
豊岡市長

## 地方創生戦略の構造

地方創生というのは、人口減少対策のことです。

日本全体でも、多くの自治体でも、予測されている人口減少はあまりに激しく、その圧倒的な量の破壊力を無視することができません。しかも、若年階層が極端に痩せ細った、いびつな人口構造への移行が同時に進行していきます。その厳しい現実に、国も自治体も、遅まきながら真正面から取り組むべきであるというのが「地方創生」です。そして地方における成果の総和でもって国全体の人口減少の緩和を成し遂げる、というシナリオになっています。

これまでも人口減少対策が行われなかったわけではありません。豊岡市でもやってきました。しかしその多くは、人口減少を前提として、人口が減ってもなお元気なまちを作ることに重点がありました。人口減少の要因そのものに戦略的に切り込む、ということがほとんどありませんでした。

あらためて予測を直視してみると、その減り方はあんまりだ。そこで、地方創生戦略では、まず目標値を定めて減少トレンドを和らげようということになっています。が、仮にその目標値が達成できたとしても、人口は減少を続けるわけですから、その上でなお元気なまちを作る、という2階建の作戦構造になっています。

そしてその量的緩和と質的転換の2つを、同じ作戦体系で同時に成し遂げることを目指しています。少なくとも、豊岡市の地方創成戦略はそうなっています。

## なぜ豊岡の人口が減るのか？―若者回復率の低さ

例えば豊岡で、なぜ人口が減るのか？その理由は単純です。

豊岡市の年齢階層ごとの社会増減を示したグラフを見ると、ほとんどの年齢階層で、社会減は生じていません（図1）。

問題は 10 代の転出超過です。とりわけ高校卒業時には約 8 割の若者が豊岡を離れ、圧倒的な転出超過が生じていることが分かります。

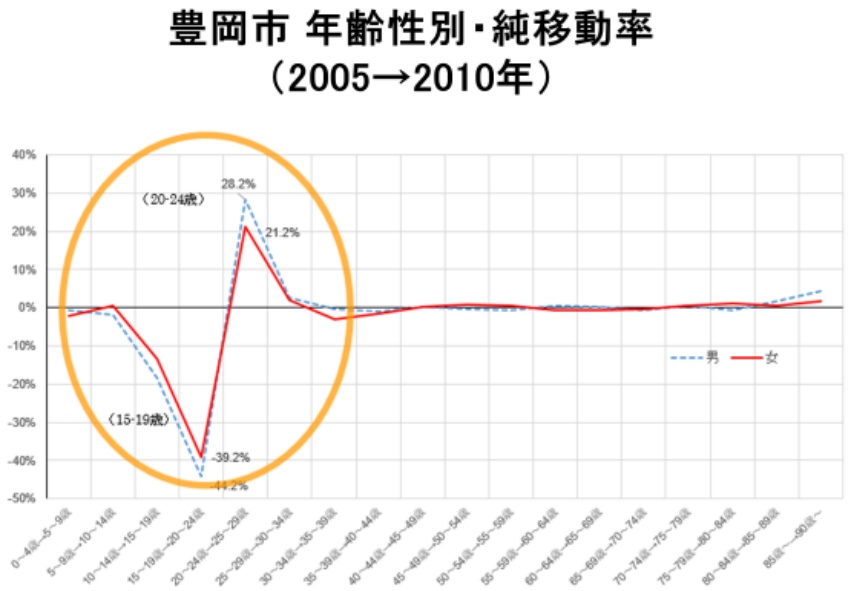
逆に、20 代では大学卒業時を中心に転入超過になっています。しかし、20 代で回復するのは、10 代で失われた人口の約 35%でしかありません。その結果、豊岡の若い人たちの数が減ります。

夫婦一組当たりが持つ子どもの数は増えていることが見て取れます（図2）。夫婦は頑張っている。しかし、未婚率の上昇も相まって若い夫婦の数が減ります。その結果、生まれてくる子どもの数が減る。この 25 年間のデータで見る限り、少子化の要因は、夫婦が持つ子どもの数が減ったことにではなく、夫婦の数そのものが減ったことにあります。そしてその減った子どもたちが成長して高校を卒業する頃にまた大量に豊岡を離れ、その大半は帰ってこない、ということの繰り返しの中で、豊岡の人口減少は続いていきます。

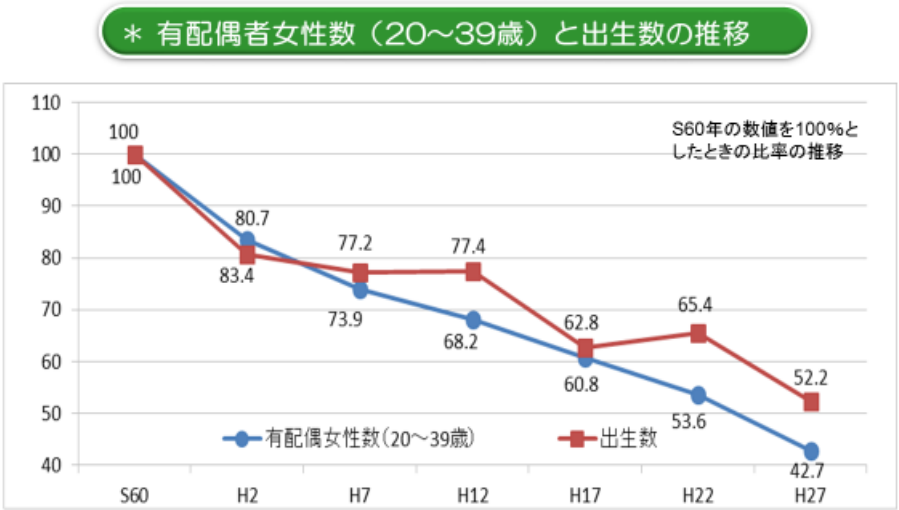
おそらく多くの地方都市で同様の構造が見られるはずです。

国は高齢者移住を地方創生の柱の一つとして進めています。もちろん高齢者の移住も私たちはウェルカムですが、戦略目的として豊岡は全く関心がありません。そこに人口減少の要因がないからです。私たち

は、要因にこそ手を付けなければなりません。




（図1）豊岡市　年齢性別・純移動率




| | S60 | H2 | H7 | H12 | H17 | H22 | H27 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 有配偶女性数（20～39歳） | 8,615 | 7,183 | 6,366 | 5,872 | 5,241 | 4,614 | 3,680 |
| 出生数 | 1,166 | 941 | 900 | 903 | 732 | 763 | 609 |

（図2）「出生数÷20 代・30 代の夫婦の数」の推移グラフ

## なぜ若者は帰ってこないのか―地方は貧しくてつまらない？

10 代の転出超過は、理解できます。豊岡には大学がないし、若い人たちが一度は広い世界を見てみたいと思うのは、当然です。しかし、20 代で、なぜこんなにも帰ってこないのか。入ってこないのか。その理由を、私たちはこう分析しています。

社会的、経済的、文化的に豊かな都市と貧しい地方。その非常に強いイメージが若い人たちとその親、祖父母たちを閉じ込めているからだ、と。

豊岡（地方）には大企業はないし、大都市との所得格差も確かにある。が、それだけではありません。豊岡（地方）には AKB48 もいないし、優れた芸術文化に触れる機会もほとんどない。おしゃれな店も通りもない。

要するに、豊岡（地方）は、貧しくて、つまらない。豊岡（地方）に帰るのは、何となく「都落ち」のような気がする。その強烈なイメージが、若者の足を止めているのだと。

そこで否定されているのは、単に豊岡（地方）における所得の低さではありません。否定されているのは、豊岡（地方）で暮らすことの価値そのものだと考えなければなりません。

## 地方創生―地方で暮らすことの価値の創造

とするなら、地方創生戦略で私たちがやるべきことは、豊岡（地方）で暮らすことの価値の創造です。もともと地方にはそれがある、ということから言えば、再発見と再創造と言ってもいいかもしれません。

## 豊岡市の戦略の旗印―「小さな世界都市」を創る

豊岡市の地方創生戦略は、そのような視点に立って組み立て、戦略体系図にまとめています。

戦略は、豊岡における人口減少の要因に即して、社会減対策としての若者回復率向上のための戦略と、自然減対策としての結婚促進と多子化のための戦略の2つから成り立っています（詳しくは市のホームページをご覧ください）。

そのうち、特に社会減対策に関する戦略の旗印として掲げたのが、「小さな世界都市―Local & Global City」―人口規模は小さくても世界の人々から尊敬され、尊重されるまち―の実現です。私たちは、この「小さな」を“Local ”と訳しています。そしてそれが実現した状態を「豊岡で世界と出会う」と定義し、実現に向けた努力を重ねています。

日本において、東京を筆頭に大都市は偉くて小さな町は偉くない、大企業は偉くて中小零細企業は偉くない、という価値観は、非常に強く私たちの心をとらえています。内面化されていると言ってもいいくらいです。これを壊さないと地方創生は実現しないし、しかし壊すことは非常に困難です。そこで、日本を飛び越えて世界で輝くこと、世界の人々から評価されることを通じて、私たちの心の中にあるその価値の序列を壊していこうという作戦です。

## 「小さな世界都市」―ローカル&グローバルの可能性

豊岡のチャンスは、グローバル化の進展の中にあります。

グローバル化の進展によって、世界は急速に同じ顔になりつつあります。同じ商品、同じショップ、同じ景観が広がり、文化的につまらない世界が広がりつつあります。とするなら、逆にローカルであること、地域固有であることが世界の中で輝くチャンスにつながります。

グローバル化の進展によって、世界は急速に小さくなりつつあります。インターネットの発達によって、豊岡のような小さなまちでも、世界の人々と直接結ばれることが可能になりました。しかも、人々は自由に行き来し、どこにでも行けるようになりました。

と同時に、大切なこと。

世界には、人口規模の大小にかかわらず本当に美しいまちがたくさんあります。ユニークで刺激的なまちがたくさんあります。アートに満ちた魅力的なまちがたくさんあります。そのようなまちに住む人々、そのようなまちがあることをよく知っている人々が、これからさらにたくさん日本にやってきます。その人々に対し、私たちは何を提供し、自らを誇るのか。私たちは、単にローカルであればいいのではなく、世界に通用するローカルを磨かなければ、世界で輝くことはできません。

## 「小さな世界都市」実現の柱

「小さな世界都市」を実現するために、4つの柱を立てています。①受け継いできた大切なものを守り、育

て、引き継ぐ、②芸術文化を創造し、発信する、③環境都市「豊岡エコバレー」を実現する、④「小さな世界都市」市民を育てる、です。

## 1　受け継いできた大切なものを守り、育て、引き継ぐ

まず、第 1 の柱、受け継いできた大切なものを守り、育て、引き継ぐ、です。

日本の多くのまちが、これとは反対の道を歩んできました。受け継いできた大切な自然を壊し、歴史や伝統を捨て去り、古いまち並みを壊して同じ顔をしたまちを作ってきました。

顔が同じなら、体が大きい方が勝つに決まっています。体力勝負では、私たちは資本力のある大都市には歯が立ちません。私たちは、別の道を歩む必要があります。大きさや高さや速さを競うのでなく、作っては壊し、作っては壊すことによって日々変わる刺激がある半面、記憶喪失のような、存在の不安に満ちたまちを作るのでもなく、受け継いできたものを守り、自分たちの工夫を付け加え、次へと引き渡していく。蓄積をするまちづくりを進める。その道を行く他はないし、その道は極めて有力な道だと考えています。

**例1　出石城下町**

豊岡には、城下町「出石」があります（写真1，2）。沢庵和尚や戦時中に反軍演説をして国会を除名された不屈の政治家・斎藤隆夫を生んだ町であり、幕末には町人が桂小五郎をかくまったりしています。古いまち並みが残り、中心部の約 23ha は国の伝統的建造物群保存地区に指定されています。

江戸時代の色合いを強く持った町ですが、街並みの大半は、明治以降に作られたものです。

出石の中心市街地は、1876 年（明治9年）の大火で3分の2が焼失しました。しかし、当時の出石の人々は、この際新しい町を作ろうとはしませんでした。町割りという、道路や堀のような構造をそのまま残し、町屋を再建する際に江戸時代の建築様式を使いました。そして人々がそのまち並みを守る努力を続けた結果、江戸時代との連続性を強く持った町として今日に至り、年間 80 万人前後の観光客を引き付けています。

（写真 1：出石城　写真 2：辰鼓楼）

**例 2　出石永楽館**

出石に、1901 年（明治 34 年）に建てられた「永楽館」という芝居小屋がありました。1964 年に閉館されましたが、持ち主が将来の復活を期待して壊さずに残しておられました。町の人々も、将来の復活を夢見て、清掃活動やイベントをしたりしながらチャンスをうかがっていました。

その永楽館を市が譲り受け、2008 年、芝居小屋として復活をさせました（写真3，4、5）。片岡愛之助さんを座頭に歌舞伎で柿落としをしました。以来9年連続で片岡愛之助さんや中村壱太郎さんらをお招きして歌舞伎をやっていますが、今では連日満席の人気を博しています。時間の経過に耐えたものが持つ風格が、永楽館にも出石の町にも漂っています。

（写真3：旧永楽館　写真4：新永楽館　写真5：舞台の様子）

**例 3　城崎温泉**

豊岡には、城崎温泉があります。木造3階建ての伝統的まち並みが残り、浴衣を着て下駄をカランコロンと鳴らしながらまちをそぞろ歩きするスタイルが受けて、年間 70 万人近い宿泊客があります（写真6）。

豊岡は、1925 年（大正 14 年）に、北但大震災を経験し、壊滅的被害を受けています。その震災前の城崎温泉の中心部（写真7）と同じ場所の震災直後の様子（写真8）です。城崎温泉は、火が出て、ほとんど完全に灰になりました。

そこから城崎温泉の復興が始まりました。

道路と川を広げ、広い防火帯が作られました。そしてまちの要所々々に鉄筋コンクリートの建物を配置して、防火壁の機能を持たせました。そんな風に、当時としては最先端の防災対策を施したうえで、復興のコンセプトは、「元に戻す」でした。

当時兵庫県は、洋風建築物で復興することを城崎町に提案しました。しかし、城崎の人々は「洋風は城崎に合わない」と猛反対をし、提案を撤回させ、木造 3 階建てのまち並みが復活をしました。そして出石の場合と同様、城崎の人々はそのまち並みを守り続け、今日に至っています。

城崎温泉では、7つの外湯と 74 軒の旅館が半径 400 メートルの円の中にほとんどすっぽりと入っています。そして一つの旅館の中に客を囲い込むことをせず、まち全体でおもてなしをする、という城崎ルールが徹底されています。

近年、外国人宿泊客が急増しています（図3）。そのほとんどは個人客で、世界各国からお越しになっています。2016 年は約4万人で、絶対数はまだ多いとは言えませんが、この5年間で約 36 倍になりました。来訪者の地域別シェアでは、国全体では欧米豪がインバウンド全体の 16%程度であるのに対し、城崎温泉では 35%を占めていることが特徴です。

この方々は、何を求めて城崎温泉にお越しになるのか。アメリカを見たいわけではありません。ヨーロッパを見たいわけではありません。日本を見たい、日本の文化を楽しみたい。だからこそわざわざ時間とお金をかけて城崎温泉にお越しになります。

（写真6：城崎温泉夜の風景　写真7：北但大震災前の城崎）

（写真8：北但大震災直後）

**インバウンドによる仕事の創出**

豊岡のインバウンド政策は、仕事創出のための政策でもあります。

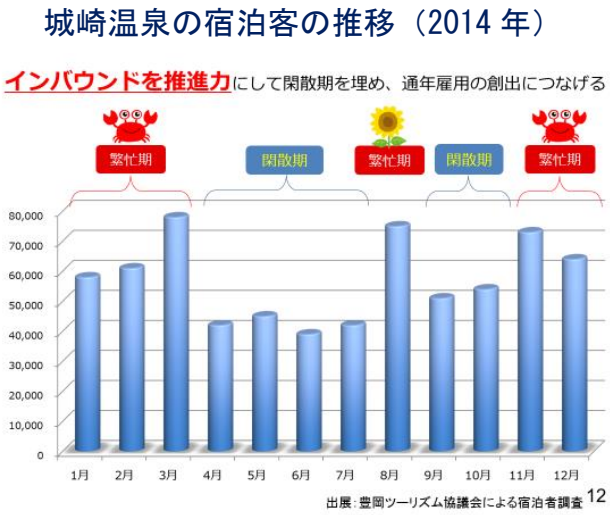
図4は、城崎温泉の月別宿泊客数の推移です。繁忙期と閑散期がはっきりしています。このこともあって、城崎温泉は繁忙期に多くの派遣労働に頼ってきました。もし、閑散期を埋めることができれば、年間を通じた稼ぎが得られるだけでなく、通年雇用が可能になります。

そこで私たちが城崎温泉の関係者と一緒になって立てたのが、閑散期をインバウンドで引っ張って埋めようという作戦です。城崎温泉のインバウンドは、絶対数は小さい中でも元々欧米系の個人客が多かったの

ですが、この国々の方々はちょうど城崎温泉の閑散期に来る傾向がありました。そこで欧米豪を中心にアジアの富裕層も含めて個人旅行客をターゲットにして、Web を媒体にして呼び込もうというものです。

このことによって通年雇用が発生すれば、それは日本文化を外国の方々に伝え、楽しんでもらうというやりがいのある仕事になるはずです。

図 3 と図 4 をご覧いただくと、今のところ作戦は成果を上げていると言っていいと思います。聞き取り調査によると、城崎温泉での新卒の採用は、2015 年度 31 人、2016 年度 35 人となっています。この点でも、一定の成果につながっているものと考えています。




（図3：城崎のインバウンド推移　図 4：城崎宿泊客数推移）

**豊岡観光イノーベンションの挑戦**

2016 年 6 月、市と民間企業が協働して、一般社団法人豊岡観光イノーベーション（TTI）という、豊岡版 DMO（Destination Management/Marketing Organization）を立ち上げました。市とウィラー・アライアンス、全但バス、但馬銀行、但馬信用金庫が出資し、人を出し合ってスタートさせました。三井物産、JTB からも人材を受け入れ、外国人スタッフも配置して仕事を進めています。分析の専門家をアドバイザーに採用し、同じオフィスで働いていただいています。

名称には、観光のイノーベーションを起こす、観光によるまちのイノーベーションを起こす、の 2 つのねらいを込めています。

この組織の最大のミッションは、観光に関するマーケティング情報を収集・分析してマーケティング戦略を立て、地域全体の稼ぐ力を強める、ということにあります。

例えば、インバウンド対策として WiFi 整備を進める傍ら、利用者の位置情報の提供を得て、どの国の人がどこの都市を経由して豊岡に入り、豊岡の中をどのように移動し、どの都市に向けて出て行っているのかを調べ、マーケティングに役立てる、というトライを始めています。日本人については、au から位置情報をいただき、年齢、性別、居住地別で同様の分析を行っています。

また、データ分析と現場の「体感」をすり合わせて、より実効性のある戦略を進めるため、市は KDDI と包括協定を結び、協働作業を進めています。

現時点では、まだ成果を出すというところまで至っていませんが、精力的に取り組んでいます。

## 2　芸術文化を創造し、発信する

「小さな世界都市」を実現するための第2の柱は、芸術文化を創造し、発信する、です。

**城崎国際アートセンター**

城崎温泉のはずれに県立の古いホールがありました。1,000 人規模のホールと宿泊施設を有した施設で、近年では利用日数は年 20 日程度という状況でした。

事情があって市がその施設を無償で譲り受けることになり、2014 年、城崎国際アートセンターとしてリニューアルオープンさせました。パフォーミングアーツ（演劇、ダンス等）に特化したアーティスト・イン・レジデンス（滞在制作）の施設です。アーティストは、最高3カ月間、無償で宿泊施設、稽古場、ホールを利用することができ、1 日 24 時間、創作活動に没頭することができます。ストレスがたまると温泉につかってリラックスすることができます。入浴料は一般 600 円から 800 円のところ、滞在アーティストは旧町民価格の 100 円で利用できます。アーティストは住民と同じだ、というメッセージを込めています。想像以上にクリエイションが進む、と好評です。

芸術監督には、日本を代表する劇作家、平田オリザさんに就任いただきました。

この施設は、オープン 1 年目から活況を呈し、世界中からアーティストが続々とやってくるようになりました。「ふたりのベロニカ」でカンヌ国際映画祭・女優賞を受賞したイレーヌ・ジャコブさんも 1 カ月滞在していかれました。2016 年度は、世界 13 か国、40 の団体から申し込みがあり、審査の上、7か国、17 団体にお貸ししています。2017 年度は、世界8か国 43 団体からの申し込みがあり、5か国 20 団体に利用いただく予定です。

芸術文化の創造への貢献において、豊岡は、東京を介さずに直接に世界と結ばれるようになりつつあります。

## 3 環境都市「豊岡エコバレー」を実現する

「小さな世界都市」を実現するための第3の柱は、環境都市「豊岡エコバレー」を実現する、です。徹底して環境のまちを作る。そのシンボルが、コウノトリです。

**コウノトリの絶滅と復活**

コウノトリは、羽を広げると2mもある白い大きな鳥で、かつては日本の各地で見られる鳥でした。しかし、環境破壊によって数を減らし、1971 年(昭和 46 年)、日本の野生最後の1羽が豊岡で死んで、コウノトリは日本の空から消えました。止めを刺したのは、農薬でした。

絶滅の前に、コウノトリを守ろうという運動が豊岡で始まり、1965 年、人工飼育が始まりました。しかし最初の 24 年間、1羽のヒナもかえりませんでした。

転機が 1985 年に起きます。ロシア・ハバロフスクから6羽の幼い鳥が送られてきて、当時兵庫県から飼育を委託されていた豊岡市の職員が懸命に育て、やがてカップルができて、1989 年(平成元年)、人工飼育の開始から実に 25 年目の春、待望のヒナが誕生します。以来 28 年連続でヒナがかえり、今 90 羽を超えるコウノトリが豊岡とその周辺で鳥かごの中で暮らし、約 90 羽が再び自由に空を飛んでいます。

**なぜ野生復帰か？**

野生での絶滅から 46 年、人工飼育の開始から 52 年、コウノトリの保護活動が明確な形を取ってから 62 年になります。長い時間と、膨大なエネルギー、たくさんの費用が必要でした。では、なぜ、それほどまでにして豊岡はコウノトリを空に帰そうとするのか？

その最大の狙いは、「コウノトリも住めるまちを作る」ということにあります。コウノトリは完全肉食の大型の鳥で、食物連鎖の頂点にいる鳥です。そんな鳥でも野生で暮らせるような豊かな自然は、人間にとっても素晴らしい環境であるに違いありません。

もう一つ大切なポイントがあります。たとえどんなに自然が豊かになってエサが豊富になったとしても、飛んできた鳥をやみくもに撃ち殺すような文化のところにコウノトリは暮すことはできません。

そこで、コウノトリの野生復帰を合言葉に、コウノトリも住めるような豊かな環境、すわなち、豊かな自然環境と豊かな文化環境をもう一度作り上げよう、というのが最大の狙いです。それを実現するために、様々な努力が積み重ねられてきました。

**拠点施設の整備**

1999 年、兵庫県は豊岡市内にコウノトリの郷公園を作りました。そこに県立大学の研究所を設置し、野生化の研究と実践を続けています。

2000 年には、郷公園の一角を市がお借りして、コウノトリ文化館を設置し、普及啓発を行っています。

**湿地再生**

コウノトリは主に湿地でエサを捕ります。そこで、野生復帰を進めるためには湿地生態系機能を豊かにする必要があります。ポイントは、水田、水路、川、そしてそのネットワークです。

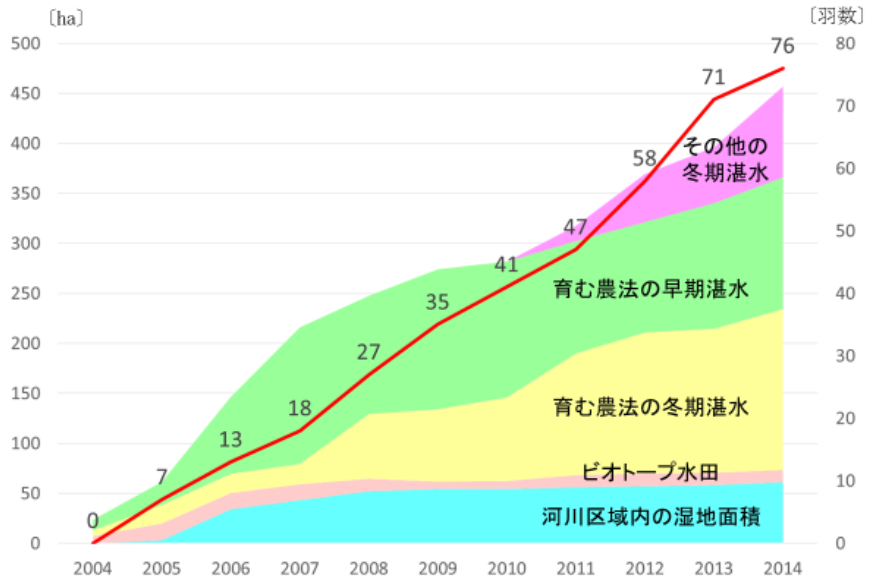
まずビオトープ水田。休耕田を利用して一年中水を張り、草の管理をしていただきます。生き物がわき豊岡の自然が豊かになり、コウノトリのエサ場になり、子どもたちの環境学習の場にもなります。市内に 24 か所、合計 12.8ha あります。

農薬に頼らない、コウノトリ育む農法も広がってきました。農家、JA、商社、県、市等が一体となって努力を重ね、2016 年は約 366ha にまで拡大しました。

こうして豊かさを増した水田と水路を水田魚道でつなぎ、水路と川との間にあった段差を解消し、その先の円山川では、国土交通省によって湿地再生事業が進められています。円山川水系で、これまでに新たに 65.2ha の湿地が国土交通省によって新たに作り出されています。

市内の湿地面積の推移と野外でのコウノトリの羽数の推移は、見事に連動しています（図 5）。

## コウノトリと湿地再生の相関図




（図 5：湿地面積とコウノトリの羽数推移）

**自然放鳥**

こうした努力が進む途上の 2005 年 9 月 24 日、ついに6羽のコウノトリが空に放れました。2007 年には、日本の野外で 43 年ぶりにヒナがかえり、46 年ぶりに巣立っていきました。

2014 年 3 月には、豊岡生まれのメスが海を渡り、韓国に1年1カ月滞在し、再び帰ってくるという出来事も起きています。

一度野外で絶滅した動物を人工飼育で増やし、再び野に帰した例は、コウノトリの前にいくつか成功例

がありました。しかしそれらは、原生的自然に帰した例であり、人里の中に帰したのは、コウノトリが世界で初めてでした。放鳥拠点となったコウノトリの郷公園には、毎年約 30 万人の来訪者があります。

**ラムサール条約の登録**

2012 年、円山川下流域と周辺水田が、ラムサールの登録湿地に認められました。希少種であるコウノトリの生息を支える湿地として、日本では初めて河川が登録されました。認定証には、「国際的に重要な湿地として認める」と書かれています。

**環境経済戦略**

豊岡が新たに開きつつある扉は、環境経済戦略です。

環境と経済は、相いれないと固く信じられてきました。しかし、そうでない分野があるはずです。環境をよくする行動が経済を活性化し、そのことが誘因になって環境行動がさらに広がるような、環境と経済が共鳴する分野があるはずです。そのような関係を「環境経済」と名づけ、環境経済を広げるため、2004 年度、「豊岡市環境経済戦略」を策定し、実行しています。

環境経済戦略は、環境をよくするためには経済を敵に回すよりも味方につけた方が得だ、という考え方に基づいています。

具体例です。

1999 年に市内に誘致した、カネカソーラーテックという太陽電池を製造する会社があります。世界中の人々がこの会社の太陽電池を設置すれば、地球温暖化対策が進み、この会社は利益を得、雇用も発生し、税収も増えます。得られた利益をさらなる研究開発に投資すれば、より高効率で安価な太陽電池が開発され、地球温暖化対策がさらに進みます。環境と経済が共鳴する一例です。

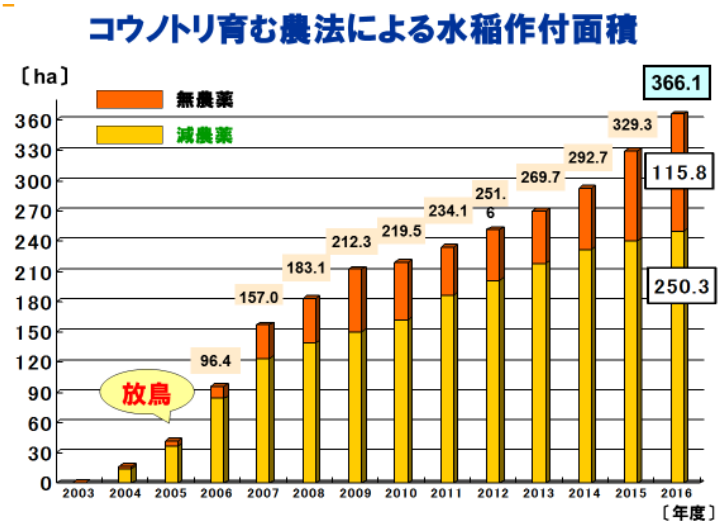
豊岡市は、環境経済事業の認定を行っています（農業は別の認証制度を設けていますので除きます）。これまでに 59 事業を認定しています。認定の条件は、①利益を追求するものであること、②環境の改善に貢献するもの、の2つです。

**コウノトリ育む農法**

もちろん、農業は決定的に重要です。コウノトリの最後にとどめを刺したのは、農薬でした。そこで、農家、JA、兵庫県の農業改良普及センター、市が一体となって、農薬に頼らない「コウノトリ育む農法」を確立し、普及を図ってきました（図6）。

この農法は、無農薬又は減農薬であることのほかに、水田の湿地生態系機能を維持するために冬期にも水を張るなどなど、生き物を育むための取組みを認定の条件にしています。

コウノトリ育むお米は消費者の高い評価を受け、高い付加価値を生み出すようになっています（表 1）。




コウノトリ育むお米の経営試算

〔10a あたり〕 〔2015年度実績〕

| 種　別 | 実質所得 |
|---|---|
| 一 般 米 | △1,283円 |
| コウノトリ育むお米（減農薬） | 39,289円 |
| コウノトリ育むお米（無農薬） | 59,500円 |

※栽培助成金を除く

（図 6:コウノトリ育む農法作付面積推移）

（表 1:所得比較・・慣行、減農薬、無農薬）

## 4 「小さな世界都市」市民を育てる

「小さな世界都市」を実現するための第 4 の柱は、「小さな世界都市」市民を育てる、です。地方創生の次世代育成戦略として、私たちはローカル&グローバル・コミュニケーション教育を展開することにしています。取組みの柱は 3 つあります。

**ふるさと教育**

まず、ふるさと教育です。学校において、豊岡の誇るべき事柄をこれまで以上に学んでもらいます。そのことによって、子どもたちの豊岡への愛着と誇りにつなげていこうという作戦です。

**英語の修得**

二つ目は、英語の修得です。これまでの幼稚園等のモデル園での取組みを踏まえ、2017 年度から、すべての幼稚園、保育園、こども園に指導者を派遣して英語遊びを展開します。また、小学校に1年生から ALT を配置し、中学校まで一貫して英語に親しむことを通じて英語を身につけてもらいます。

**演劇によるコミュニケーション能力の修得**

三つ目は、演劇によるコミュニケーション能力の修得です。市の芸術参与でもある平田オリザさんの指導の下、これまでのモデル校での取組みを踏まえ、2017 年度からすべての公立小学校の1年生と中学校の1年生に演劇の授業を受けてもらいます。自分たちで演劇を作り、演じることを通じて表現力を身につけ、コミュニケーション能力へとつなげていこうという作戦です。

**ここでいいのだ**

今後豊岡にはさらに多くの海外の方々がやってこられることと思います。その方々に対し、豊岡の子どもたちは、自分たちのまちのことを誇りをもって、英語というツールを使って、表現力豊かにコミュニケーションをとる、といったことができるようになるはずです。

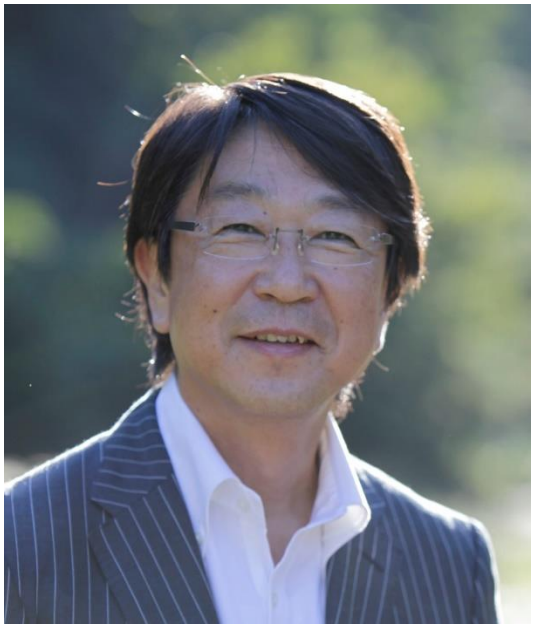
この子どもたちは、やがて多くは大学進学時に豊岡を離れていくだろうと思います。しかし、今よりはたくさん帰ってきてくれるのではないか。幼い頃から豊岡で世界と出会う経験をすることによって、東京にいなくてもいいのだ、という意識を育んでくれるのではないかと期待しています。

子どもたちは、おそらく今の私たちよりはるかに多く世界の各地を見ることになるだろうと思います。しかし、ローカル&コミュニケーション教育がもしうまく機能すれば、「豊岡は、パリではないし、ウィーンでもないし、ニューヨークでもない。そのことはよく知っている。日本中、世界中に素敵なところがあることはよく知っている。それでもなお、自分はここでいいのだ。豊岡でいいのだ。ここにいて、家族を支え、家族に支えられ、地域を支え、地域に支えられ、そして世界の人々と結ばれていくのだ」というどっしりとした態度の大人として育っていってくれるのではないかと期待しています。

そうなれば、豊岡の人口はこれからも減少を続けるでしょうが、豊岡はなお活力を持ち続けることができる。そう信じて、地方創成戦略を進めてまいります。

T

執筆者紹介：中　貝　宗　治（なかがい　むねはる）



【生年月日】
昭和 29（1954）年 11 月４日、兵庫県豊岡市生まれ。

【住　所】
兵庫県豊岡市下宮（しものみや）499 番地の 1

【学　歴】
豊岡市立三江小学校・市立豊岡南中学校・兵庫県立豊岡高校を卒業
京都大学法学部卒業（昭和 53（1978）年3月）
大阪大学大学院経済学研究科経営学専攻前期課程修了（昭和 62（1987）年3月）

【職　歴】

| | |
|---|---|
| 昭和 53（1978）年　4月 | 兵庫県庁　入庁 |
| 昭和 60（1985）年　4月 | 大阪大学大学院経済学研究科　派遣 |
| 平成　2（1990）年 12 月 | 兵庫県庁　退職 |
| 平成　3（1991）年　4月 | 兵庫県議会議員　当選 |
| 平成　7（1995）年　6月 | 兵庫県議会議員（2期目）　文教常任委員長　就任 |
| 平成 11（1999）年　4月 | 兵庫県議会議員（3期目） |
| 平成 11（1999）年　6月 | 総務常任委員長　就任 |
| 平成 12（2000）年　4月 | 自民党県会議員団政務調査会長　就任 |
| 平成 13（2001）年　6月 | 兵庫県議会議員　辞職 |
| 平成 13（2001）年　7月 | 豊岡市長　就任 |
| 平成 17（2005）年　3月 | 合併による新市設置のため豊岡市長　退任 |
| 平成 17（2005）年　5月 | 新「豊岡市」市長　就任 |
| 平成 21（2009）年　5月 | 豊岡市長（2期目） |
| 平成 25（2013）年　5月 | 豊岡市長（3期目） |

【主な公職】　豊岡市長
北但行政事務組合管理者
但馬広域行政事務組合管理者
一般社団法人豊岡観光イノベーション理事長

【著　書】　「鸛（こうのとり）飛ぶ夢」（平成 12（2000）年7月）

【好きな言葉】“夢はでっかく　根は深く”
“願うこと　願い続けること　投げ出さないこと”

このニュースレターは、未来を拓く提言を当代トップレベルの知見により、発信します。
ご意見、賛同、助言、ご提言を当財団までおよせください。
一般財団法人「未来を創る財団」 事務局　パブリック・コミュニケーション担当
abrighterfuture@theoutlook-foundation.org
http://www.theoutlook-foundation.org/

© 2017 The Outlook Foundation, All rights reserved.